

一八八五年十月二十四日(土)

シャームプクルの家でナレンドラ、サルカル先生はじめ、信者たちと共に

サルカル先生と比較宗教(Comparative Religion)

タクール、聖ラーマクリシュナは、ナレンドラ、マヒマーチャラン、校長、医者、のサルカル先生はじめ信者たちと共に、シャームプクルの家の二階の部屋で坐つていらつしやる。時間は午後一時頃。

一八八五年十月二十四日、カルティク月九日。

聖ラーマクリシュナ「あなたのこの治療法(ホメオパシー)は、なかなかいいね」

医師「同種療法(ホメオパシー)は、病状を必ず医学書と照合しながら行ふのです。西洋音楽のように楽譜にしたがつて歌うわけです。ギリシュ・ゴーシュは何処にいます? いえ、何、昨日きのう彼はずっと起きていたものですからね」

聖ラーマクリシュナ「ところで、わたしは前三昧のとき、大麻酒シッパディを飲んだような具合になるんだが、これはどういうわけだろうね?」

医師「(校長に)——神経中枢の働きが抑止されるから、それで無感覚になつて足もヨロヨロするの

です。ありつたけのエネルギーが脳の方に行つてしましますからね。この神経系が生命を成立させているのです。えり首のところにありますね——延髄と言いますが。ここを傷つけられると、ほとんど生命を維持してゆくことは出来ません」

マヒマー・チャクラバルティ氏がスシムナーの管を通るクンダリニーの話を始めた——「脊髄の中にスシムナーの管が精妙な相かたちで存在しているのです——目には見えませんがね。マハーデーヴァ（シヴァ）がおつしゃつたことです」

医師「マハーデーヴァは完成した人間を検査したのですよ。一方、ヨーロッパ人たちは胎児から完成期に至るあらゆる段階を調べているのです！ 比較歴史を学ぶ方がいいですね。サンタル（中部インドの部族）の歴史を調べていきますとね、カーリーというのはサンタルの一女性だったということがわかります——剛勇無双の女戦士だったのです（一同笑う）。

笑つちやいけません。それから、比較解剖学がどんなに人類に益しているかお聞きなさい。はじめ、^{すいぞう}脾臓液と胆汁の作用の相違がわかりませんでした。後にクロード・バーナードがウサギの胃や肝臓を解剖して試験した結果、胆汁の作用と脾液の作用が違うということを発見したのです。

人間より下等な動物たちの生理作用も、観察することが大事だということになるのですよ。人間だけを見ていてもうまくないのです。

これと同じ理由で、比較宗教が特に人類にとって有益だと思えますよ！

この方パラムハンサ・デシウ（Comparative Religion）のおっしゃる言葉が、我々の心に深く感銘を与えるのはなぜでしょう？ この方

はいろんな宗教の真理を体験してこられたからです。ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、シャクティ派、ヴィシヌ派と——みんなご自分で修行してその真髓を体得されたのです。蜜蜂がいろんな花から蜜を集めてきた場合に、最も上等な蜜ができるのです」

校長〔医師に〕——マヒマーさんはサイエンスの本もずい分読んでおられますよ」

医師「ハッハッハッハ、それは、それは……。マックス・ミュラーの『宗教の科学』を、ですか？」

Science of Religion

マヒマー「（聖ラーマクリシュナに向かって）——あなた様のご病気を、医学博士方はどうすることができるといいますか？ あなた様が病気になられたと聞いたとき、医者たちの高慢を増すことになりはしないかと私は心配いたしました」（訳註、医者たちの高慢——聖ラーマクリシュナの病気を治療したことからくる高慢）

聖ラーマクリシュナ「この人はとてもいい医者さんだよ。それに、とても賢明な人だ」

マヒマー「おっしゃる通りです。この方は大きな汽船、私どもは皆、小舟でしょう」

サルカル先生は合掌して、謙遜して頭を下げた。

マヒマー「でも、ここ（タクルのところ）へ来れば、どの人もみな同じですよ」

タクルはナレンドラに向かって歌をうたうようにとおっしゃった。

ナレンドラの歌——

(一) 君こそわが生涯の北極星

この世の道なき海の上に
わが船は再び迷うことなし

◇ ◇ ◇
(二) 我執に狂いしわが心、際限なき欲は次つぎと

◇ ◇ ◇
(三) 無限にしてこの壮麗なる

大宇宙はただ、君の御手わざ！

あまたの美しき 遠近の世界は

君あそび給う よろこびの家

◇ ◇ ◇
(四) 大いなる獅子の座につき給う宇宙の父は

三千世界の歌を聞きて楽しみ給う

地球に生まれし吾も小さき声で歌いつつ

父の宮居の戸口までたどり着きぬ

われ何も欲せず、ただ君にまみえたし

父よ！ 願わくば、わが歌をききたまえ

太陽と月たちの間に坐りて

われ声をかぎりに君を讃えん

◇ ◇

(五) ああ、王の中の大王よ 私に会って下さい！

お慈悲です！ 私に目をお留め下さい

あなたの懐かしい足もとに、この命を供えます

世間という名の炉で、火に焼け焦げた命を

私の心は、さまざまな罪に汚れ果て

幻影の網に捕らえられて、息も絶えだえ

慈悲深い御方よ 甘露の雨で私を洗い清め

消えかかった魂を、活き返らせて下さい

◇ ◇

(六) ハリの甘露の酒飲みて

わが心よ、酔いしれよ

地べたを転げまわりながら

ハリ、ハリと呼んで泣くんだよ

ハリ——ヴィシヌヌ神々クリシユナのこと

聖ラーマクリシユナ「それから、在るものすべてあなただけ！を！」

医師「アハー！」

歌は終わった。医者感動して、身動きもせず坐っている。

しばらくして医者は、心からの敬愛の情を体全体に表わして合掌し、タクールに言った——「それでは、今日はこれでおいとま致します。明日また参りましょう」

聖ラーマクリシュナ「ちょっと待っておくれ！ ギリシユ・ゴーシユを迎えにやったから——。

（マヒマーを指して）この人はとても学問のある人だが、ハリ称名のときは踊りなざるんだよ。ちつとも高ぶったところがないんだ。コンナガルまで来てくれてね——わたしがあそこに行くからと言って。それに、この人はとても自由な身分なんだよ。金持ちで、誰にも雇われていない。（ナレンドラを指して）これはどうだね？」

医師「実に立派な青年です！」

聖ラーマクリシュナ「二人の信者を指して）それから、この人は……」

医師「アハー！」

マヒマー「インド哲学を学ばないうちは、哲学を勉強したなどと言えません。サーンキヤの二十四の宇宙原理をヨーロッパ人は知らないのですからね——おそらく、理解できないでしょう」

聖ラーマクリシュナ「ハハハ……。三つの道のこと？」

マヒマー「サットの道——つまり智識の道。チットの道——ヨーガです、カルマ・ヨーガ。これに人生の四つの任期（アーシニラマ）における働きと義務が含まれています。それからアーナンダの道——信仰と愛の道。

あなた様の中にこの三つの道全部が表現されています。あなた様こそ、この三つの道をごとく我々にお示し下さるのです！」(訳註、四つの住期——アーレンツ、フランドル、イギリス、ウイッカ——学生期、家住期、林住期、遊行期)

聖ラーマクリシユナ「笑いながら」わたしが何を言うつて？ ジャナカ王がしゃべつて、シユカ

デーヴァは聞き手！」(訳註——これはマヒマーが雄弁に語つた説明に対しての言葉)

サルカル先生は帰つて行つた。

〔日が暮れてからの三昧——ニティヤゴパールとナレンドラ——ジャバを通じての見神〕

日がつつぱり暮れて月が出た。今日は満月の次の土曜日。カルティク月九日。タクールは三昧にお入りになった！ お立ちになったままである。ニティヤゴパールが信愛で溢れんばかりの表情をしてそばに立っている。

やがてタクールはお坐りになった。ニティヤゴパールがお足をさすつている。デベンドラ、カリパダはじめ、大ぜいの信者たちがそばに坐っている。

聖ラーマクリシユナ「(デベンドラたちに)——いま、わたしの心にこういうことが思い浮かんだよ。ニティヤゴパールの今の状態は、いずれ変わるだろうと。——あれの心が全部、わたしのところへ来るようになる——わたしの中にいなさるあの御方のところだね。

ナレンドラを見たかい？ あれの心はスツカリわたしのところに来てゐるんだよ！」

大部分の信者たちは家に帰つた。タクールは立つておられ、一人の信者にジャバのことを話してい

らっしやる。

「ジャパというのは、誰もいない静かなところで声を出さずに神の名をくりかえし念ずることだよ。一心に称名しているうちに——ジャバしているうちにあの御方のお相すがたが見えてくる——あの御方に会えるようになる。岸にくさりでつながれている丸太がガンガの水の中に沈んでいる。くさりの目を一つ一つたどりながら水の中に入り、そのまま、又くさりにつかまりながら進んで行くと、最後には丸太にさわる事が出来る！ ちようどそんなふうにして、ジャバをしながらだんだんと心が深く沈み、ついには至聖なる御方に会えるんだよ」

カリパタ「笑いながら信者たちに向かつて）——私たちのお師匠さまは大へんな御方なんですよ！（お師匠さまのところに来る人は）ジャバも瞑想も、そのほかの苦行のようなものも必要ないんですよ！ はっはっはっは」

そのとき、タクールは突然こうおっしゃった——「これ（喉の痛み）が、つらくてねえ」

タクールの喉の病気のことである。デベンドラはこう言う——「そんなことおっしゃっても、もう騙だまされませんよ」デベンドラは、タクールが信者たちの目をくらすために病気に見せかけていらっしやる、と思っっているのだ。

信者たちは帰った。夜は数人の若い信者たちが交替でここに泊まることになっている。今日は校長も泊まる予定だ。